

Techno-Ocean News



March 2002

No. 4

テクノオーシャン2002 ~A Vision of Ocean Networks~

国際エキジビション／国際シンポジウム／学術研究団体展

11月20日 水 ~22日 金 神戸国際展示場にて開催

主催：テクノオーシャン・ネットワーク(TON)、
海洋科学技術センター(JAMSTEC)、(財)神戸国際観光コンベンション協会(KCVA)、(財)地球科学技術総合推進機構(AESTO)

<http://www.techno-ocean.com>

国際シンポジウム 一公募論文の募集 4月15日まで!!

海洋の科学技術に関する幅広いテーマの論文を募集中です。

- ◆ 公用言語：英語
- ◆ 論文要旨（アブストラクト）提出要領
 - ・ 言語：英語。ただし日本語でも可
 - ・ 内容：題名、著者名、所属、連絡先、
要旨（英語で400words、日本語で2000字程度、A4 1枚）
 - ・ 受付方法：インターネットまたは郵送による
 - ・ 書式：テンプレートをテクノオーシャン2002のホームページ（上記）よりダウンロードしてください。
あるいは、事務局に電話等でご連絡いただければ執筆要領をお送りします。
- ◆ 要旨審査と採否通知：Technical Program Committeeにて査読審査後、5月中旬頃に採否結果をお知らせします。
- ◆ 本論文提出要領：英語にて9月20日までに提出いただく予定です。執筆要領は、採否通知とともにお知らせします。
- ◆ 当日発表：英語（一部、日本語による発表が可能なセッションを設ける予定です。）



国際エキジビション

- ◆ 出展料：¥300,000-（税別）／小間（3m×3m=9㎡・スペース渡）
初回出展者のためのトライアウトブースもご用意しております。
（¥150,000-（税別）／小間（2m×2m=4㎡・基礎装飾付））

学術研究団体展

- ◆ 対象：海洋関連の学術研究団体（大学・学会・研究機関等）
- ◆ 出展料：¥50,000-（税別）／小間（2m×2m=4㎡・基礎装飾付）

【お問い合わせ先】 テクノオーシャン2002事務局（株）アイシーエス企画内）

Tel：03-3263-6881／Fax：03-3263-7537／e-mail：tocean@ics-inc.co.jp



(社)日本造船学会の活動について

日本造船学会 会長 大坪 英臣

社団法人日本造船学会は、1897年(明治30年)に創設された我が国を代表する造船工学および海洋工学を中心とする分野の学会です。英国造船学会(RINA)、英国造機学会(IMAE)、米国造船造機学会(SNAME)など共同して造船工学関係の国際的学術活動を指導・展開してきました。また近年重要性の高まっている海洋工学(海洋環境工学)進歩のための学術分野に対しても活発な活動を展開しております。以下主な学会活動状況を紹介いたします。

研究の振興

◆ 研究委員会

造船・海洋学の専門分野に7つの研究委員会及びその下部機構として14の専門部会を設け、延べ約1,000名の研究委員が年間約90回の会合を開き、専門的な調査研究活動を活発に展開しています。

各研究委員会の活動成果は学会誌「Techno Marine」に報告掲載されると共に、シンポジウムを通して、会員をはじめ広く造船・海洋分野関係者に普及を図っています。

◆ 学術講演会

会員の研究成果発表の場である学術講演会を、毎年春季及び秋季の2回開催し、年間約120件の学術論文が発表・討論され活況を呈しています。

若手研究者の研究活動活性化を目的とした研究



「ポスターセッション」会場風景

成果発表の場としての「ポスターセッション」を開催し、若手研究者の活発な討論の場を提供しています。

情報発信

◆ 造船学会誌

本会の発信するさまざまな情報を全会員に周知するための学会誌「Techno Marine」を隔月発行し、特集、トピックス、資料など充実した内容を会員へ提供しています。

◆ 論文集

春季及び秋季学術講演会にて発表された学術論文及び討論内容を掲載した「日本造船学会論文集」を年2回刊行し、研究活動内容を会員及び造船・海洋分野関係者に紹介しています。

◆ 英文論文集

国内外の造船・海洋に関する優れた学術論文を掲載した英文論文「Journal of marine Science and

Technology(JMST)」を、年4回刊行・配布し、内外の造船・海洋関係者に紹介しています。

◆ ホームページ

本会のさまざまな活動情報等を掲載したホームページを開示し、会員のみならず一般の方々にも本会に関する情報を提示しています。

国際交流

ITTC(国際試験水槽会議)、ISSC(国際船舶海洋構造会議)、IMDC(船舶・海洋システム設計に関する国際会議)、OMAE(海洋と極地工学に関する国際会議)等々の多くの国際研究会議を主催・共催し、国際的に重要な役割を担っています。

また若手研究者・技術者を毎年数名海外に派遣し、研究活動の活性化を図っています。

活動の展望

会員にとって学会の存在の意義がより深まるように、若手技術者・研究者の活動への積極的な支援や、役に立つ講演会の開催、シニア会員との交流を深める仕組みを作る等新たな事業を起こそうとしています。また、海事工学に関連する他の学会との合同講演会を企画しており、お互いの研究動向を知り、新たな知己を得ることにより、今後の研究に学際的な融合や展開が起きることを期待しています。

【連絡先】

住所：〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-15-16 海洋船舶ビル

TEL：03(3502)2048/2049 FAX：03(3502)3150

http://www.snaj.or.jp/

E-mail：office@snaj.or.jp

(社)土木学会 海洋開発委員会の活動について

海洋開発委員会委員長 高山知司

海洋開発委員会の経緯と活動状況

1960年代に入ると、海洋開発の重要性、特に、海底石油などの天然資源の確保といった観点からその重要性が叫ばれるようになった。このような社会情勢の中で、海洋開発委員会が1969年に土木学会の中に設立され、そして、1970年に第1回海洋開発シンポジウムが開催された。1978年の第9回まで継続して行われ一時中断されたが、1985年に第10回海洋開発シンポジウムが再開された。シンポジウムの再開によって講演集は、「海洋開発論文集」として発刊、2001年のシンポジウムまでに17巻の「海洋開発論文集」を発行してきている。

当初、海から天然資源を確保することが海洋開発の大きな目的であったが、1980年以降、人類の

生存に与える海洋の役割が新たに認識されるようになり、海洋空間の利用から海洋環境の保全にいたる幅広い活動が海洋開発として認知されるようになった。これによって、海洋開発委員会の活動の範囲も、身近な親水空間の創出から沿岸生態や環境の改良・保全まで広がってきた。

海洋開発委員会の主要な活動として年1回、2日間にわたって、海洋開発シンポジウムを開催しているが、この種の問題に対する研究発表が増えている。また、海洋開発委員会では、小委員会活動も行っており、現在、海洋環境利用調査小委員会と改革小委員会の2つが活動している。海洋環境利用調査小委員会では、沿岸部から地球規模に至る海洋の利用と環境に係わる技術の現状と問題点を調べ、ほぼ、中間報告の原稿が完了した状況にあり、これをどのように利用するか検討しているところである。

海洋開発シンポジウムの活性化

海洋開発シンポジウムにおける発表論文数は過去に比べれば微増しているが、最近では110～120編と大きな変化はない。既に述べたように海洋開発に対する認識の変化で、沿岸部から海洋まで、また、生態から環境まで非常に広い範囲を対象に

することになり、土木学会海岸工学委員会が主催する海岸工学講演会の対象と重なることが増えてきた。対象領域が近いために、重なり合う部分があるとしても、大幅に重なることは各委員会の独自性や相互の協力・発展にとってマイナスである。そこで、海洋開発委員会としては、委員構成において民間の委員が多いことに配慮して、海洋開発シンポジウムを学術よりも実務に係わる問題を討議する場と位置付けることにした。そのような方向にシンポジウムを向けるには、新しい企てが必要である。

そこで、前述の改革小委員会を新たに設置して、検討を行ってきている。検討の中で、次回のシンポジウムではテーマを設定した4つの特別セッションを設けることに決めた。次回のシンポジウムへの応募論文は既に締め切っているが、約30%程度応募数が増えた。改革小委員会を今後どのように発展解消するかまだ結論は出していないが、これから検討してゆきたい。

【連絡先】

住所：〒160-0004 東京都新宿区1丁目無番地
土木学会 海洋開発委員会

URL：<http://www.jsce.or.jp/committee/ocean/ocean.htm>

海の安全と危機管理

海上保安庁国際・危機管理官 後藤靖子



12月22日未明鳴り響いた携帯電話が私にとっての九州南西海域不審船事案対応の始まりでした。事案の概要はマスコミでも詳細に報道されましたので改めての説明は必要ないかと思いますが、日本の安全に対する思いこみをうち砕くには十分のものだったのではないかと思います。事案解明のため毅然と対応していく必要があると考えています。

日本は海にひらけた国です。日本人の生活は海を通じてもたらされる多くのものに支えられて成り立っています。日本は海の安全と安心の上に成り立つといっても過言ではないと思います。しかし、一見平穏に見える日本近海で様々な事案が発生しているということに多くの国民は気づいていないのではないかと思います。

海上保安庁は国土面積の36倍の海域を担当していますが、その中には例えば排他的経済水域の境界も確定していない海域もありますし、領土問題もかかえており外交上微妙なエリアもあります。その中であって海上保安庁は現場での現実としての対応を取ることを求められることになるのです。

一方で、海の世界では国を超えた協力関係も歴史の中で培われています。海難救助、環境対策、密航密輸など近隣諸国の海上警備機関間において通報や共同訓練、共同オペレーションなど連携体制が近年急速に進みつつあります。海賊対策への対応のためにアジア海域への巡視船の派遣やアジアの海上警備機関の人材育成などでの協力も行っています。こういった連携が危機管理には不可欠だとの思いを強くしています。

不審船事案では、現場の海上保安官は小型巡視船で向かい風20メートルの大時化の中、嘔吐、空腹、疲労の中高い使命感のもと冷静沈着に対応したと思います。日本の海の安全と安心のためにこれからも使命を果たしていきたいと改めて身を引き締めています。



KSNAJ 2002
90th Anniversary

関西造船協会創立90周年記念 Asia Pacific Maritime Congress 国際会議

～5月21日～23日、神戸で4シンポジウム同時開催。10ヶ国以上、約320名参加予定～

関西造船協会（姫野洋司会長。現会員数2,241）は1912年造船協会阪神倶楽部として発足し、今年創立90周年を迎えるが、その記念事業の一環でAsia Pacific Maritime Congress国際会議を開催する。

同会議は、アジア太平洋地域の15の海事分野の学協会代表を招聘するとともに、これまで独立して行われていた国際シンポジウムを同時開催することにより、海事と海洋環境に関する研究連携の強化を世界に向けて宣言する。

すなわち、関西造船協会90周年記念式典、祝賀会に併せて、①アジア太平洋地域の学協会の連携を討議する「アジア海事フォーラム」、②海上輸送や海事史を中心に未来の船を考えるシンポジウム「New S-Tech 2002」、③1987年以来アジア地区で毎年研究情報を交換している構造力学のシンポジウム「TEAM 2002」、④若手研究者の登壇門として知られる流体力学のシンポジウム「AP Hydro」、が同時に開催され、総計10ヶ国以上から320名前後の参加者が見込まれている。

同協会では、この機会に船舶工学、海洋工学、船用機械工学、航海学、海洋学、水産学などあらゆる海洋海事分野の方々が多数、神戸に集まり、アジア太平洋地域での連携を一層強化し、わが国のリーダーシップ確立の基礎にしたい、と関係者の積極的な参加を呼びかけている。

※同協会は、テクノオーシャン2002で海洋空間利用と環境修復についての特別セッションで協力予定。

【連絡先】〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-1 大阪大学大学院工学研究科船舶海洋工学専攻気付。

電話：06-6879-7593。URL: <http://www.ksnaj.or.jp/>

2002年4月以降、国内で開催予定の主な海洋関連国際会議・展示会

名称	会期	開催都市	会場	website,e-mail
Sea Japan	4月10日-12日	東京都	東京ビッグサイト	http://www.seajapan.ne.jp/
第26回ICHCA国際会議 (26th ICHCA International Conference)	4月15日-17日	横浜市	パシフィコ横浜	http://www.ichca2002yokohama.com
UT (Underwater Technology) 2002 International Symposium	4月16日-19日	東京都	ニュー山王ホテル	http://underwater.iis.u-tokyo.ac.jp/ut02/
国際捕鯨委員会 (IWC) 第54回年次会合	4月25日-5月24日	下関市	海峽メッセ下関	http://www.iwcoffice.org/2002_meeting.htm
関西造船協会創立90周年記念国際会議 (Asia Pacific Maritime Congress)	5月21日-23日	神戸市	神戸国際会議場	http://www.ksnaj.or.jp/
ISOPE2002 (第12回国際海洋極地工学会議)	5月26日-31日	北九州市	北九州国際会議場	http://www.riam.kyushu-u.ac.jp/isope
PACON 2002	7月21日-26日	千葉県	幕張メッセ	http://www.hawaii.edu/pacon/pacon2002.htm
TECHNO-OCEAN 2002	11月20日-22日	神戸市	神戸国際展示場	http://www.techno-ocean.com



第26回ICHCA国際会議の開催について

国際荷役調整協会日本国内委員会 (ICHCA JAPAN) と社団法人港湾荷役機械化協会は、横浜市の協力と国土交通省の後援の下、第26回ICHCA国際会議を本年4月15日 (月) から17日 (水) の日程で、横浜市のパシフィコ横浜を会場にして開催いたします。

ICHCA (国際荷役調整協会) は1952年の創立以来、世界の貨物輸送に対して大きく貢献し、様々な実績をあげてきました。ちょうど創立50周年という記念すべき2002年に開催される第26回ICHCA国際会議は、国際的にも経済発展が注目をあびてきている東アジアで初めて開催される会議になります。

今回の会議では、IT (Information Technology) と貨物輸送との係わりに焦点をあて、ターミナルの生産性向上、輸送方式の革新、荷役システムの自動化などITを新しいToolとして活用すべき課題について、多方面から考えていきます。お問い合わせは、下記まで。

【ICHCA 2002 事務局】 〒106-0032 東京都港区六本木1-4-30 六本木25森ビル

クリエイティブ・コンベンション・センター内

Tel.03-5574-8701 Fax.03-5574-8696 E-mail: ichca02@ccc-inc.co.jp

ホームページ <http://www.ichca2002yokohama.com>

編集室から

「春の海、ひねもすのたり、のたりかな」と俳句が詠むように、かつてわが国はのんびりと平和な時を過ごした。ところが、今や日本海周辺は外国船による密漁や密航・密輸が横行するだけでなく、外国船による海洋汚染も頻りに発生。最近の例では正体不明の不審船までも登場、国際色豊かな賑やかさを呈している。

今号では、こうした不審船に対応した海上保安庁の後藤靖子危機管理官から現場の生々しい実情をレポートしていただきました。まさに国民の知らない「海の現場」でわが国の安全が守られていることを改めて知らされました。

これからも単なる報告広報宣伝だけでなく、広く海洋関係の話やニュースを取り上げ、情報を提供したいと思います。(地)

Techno-Ocean News No.4 2002年3月発行 (年4回)

発行：テクノオーシャン・ネットワーク

〒650-0046 神戸市中央区港島中町6丁目11-1

(財)神戸国際観光コンベンション協会内

☎078-303-7516 ☎078-302-1870

URL: <http://www.techno-ocean.com>

e-mail: techno-ocean@keva.or.jp

ロゴ&ヘッダーデザイン：東 恵子 (東海大学短期大学部教授)